



成人指定

販売年月日  
二〇二二年八月二十二日

JUJUTSU KAISEI  
Unofficial Fanbook

Itadori Yuji X  
Fushiguro Megumi



どんな

虎伏でも愛ぞ…

つて許せる人向け

## 虎杖×乳牛伏黒

伏黒が乳牛になったわけじゃなく  
違う世界の伏黒(乳牛)が何故か俺の部屋に！

そして…

IQがちんぼだった……！！！！

どうなっちゃうの！俺！！



僕 最強だから  
時空歪ませれるん  
だよな

ハッ！  
おっけらららー！  
どんなふうにか？

いい反応だね！  
特別に見せて  
あげちゃおうッ

時空よ

歪めッ

……  
こんな  
感じかな？

どう  
玉んだのか  
教えてくれる？

説明しろと  
言われると難しい……  
一秒前に戻った  
だけかもしれないし

パラレルワールドに  
飛んだかもしれない

信じてないね？

へー  
すげえ

できるから！  
僕ほんとうに  
できるからッ！



五條先生の  
時空歪み話  
長かったな！

まあでも

●境界に  
行くとか

同じ日をも  
何度も何度も  
繰り返すとか

違う世界の  
誰かがいるとか

確かに現実には  
おこったよ

かた

面白い

かも…

十文字

あそ

まが

いた  
らな

…

あそ

!?

…

どうしたんだ  
その格好…

いやそれ  
こっちのセリフ  
ツ!!!!!!





間違いない  
この伏黒は

俺の知ってる  
伏黒とは違う伏黒だ！

五条先生の  
時空の歪み話は  
本当だったんだ！





おれは  
最強の  
男だ

おれは  
最強の  
男だ

おれは  
最強の  
男だ

おれは  
最強の  
男だ

おれは  
最強の  
男だ



あつ

あ

おまんに待って...



おまんこ  
マツサージって  
やっぱりセツ...

あつ

あつ



あつ

あつ

あ...  
あの伏黒さん

あつ



今日の  
いたで...

あつ

いじわる  
だ!



ストップ!

ストップ!  
伏黒じー!



あ



喰って  
やゑって

俺がオマエを  
喰ってやる



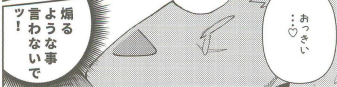
もういい！  
俺がする！

意地悪って  
いうか...  
俺は伏黒の  
知ってる  
俺じゃない  
というか...  
...



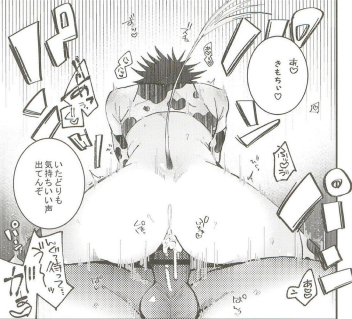
待っ！

ん

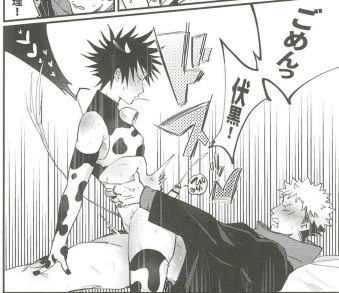


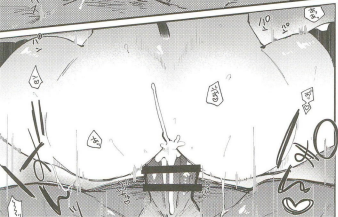
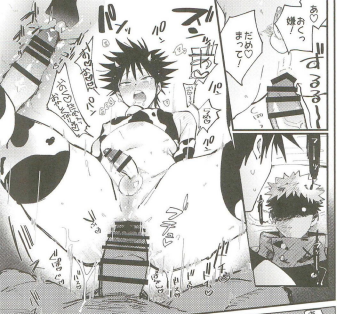
ん...  
ん

煽る  
ような事  
言わないで  
ッ！

















## 飼育員虎杖×伏黒

乳が出ない伏黒に  
「おまんこマッサージしなくちゃ！」  
と3日、中に出し続けたあとに  
これ(乳牛の)伏黒と違う！と気づいた  
おっちょこちょいな飼育員虎杖さんとの  
ほのぼの漫画。









伏黒って  
路没なんだな

あ！  
舌打ちした！



乳首出して  
弾いたりしたら  
気持ち良さそうに  
イってたよな

やっぱ路没って  
敏感なのかな？

路没の鬼頭が  
歌うのをアムと  
一聴で



虎杖の顔で

出会い系の  
おっさんみたいな  
喋り方すんな！

俺また  
26歳なんだけど！  
ひどくない？



大人の虎杖が  
かっこよくて

※仕事込みで働く人

正直満れる

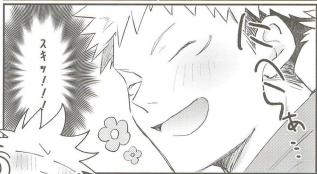


でも俺には  
俺の虎杖がいる...

俺の虎杖は  
あの虎杖だけだ

例えこの虎杖が  
虎杖だったとしても

違う世界の虎杖なら  
俺の好きな虎杖じゃ



スキッ！！



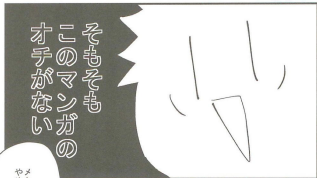




こんな  
かんじで  
どうか  
どう!?

クレーム  
止める  
あんの  
か?

モウモウモウ



そもそも  
このマンガの  
オチがない

メタ発言  
やめる

## いたふし

虎杖のえっちなお願いを  
なんでもきいてくれる伏黒。

そんなふたりの一コマ



※母乳でもなんでもないオマケの虎杖



伏黒お！  
今日は

おちんちん  
マッサージ師プレイ  
がしたいです！



お願い  
しますッ



べつに  
いいけど...

あんまり  
そういの  
くわしくない

台本

く用意  
しました！

準備  
いな

伏黒は、  
俺のお願いを  
断らない。

伏黒

伏黒



おちんちん

虎杖さん

おちんちん  
濃くこつてますね

えい  
そのコナカ  
ママ

はい  
カチカチの  
コチコチです



ええ  
噛み入り  
です

びっ  
婿業!?



こんな風に  
触ると

中の老練者が  
おちんちんが  
おちんちんが

おちんちん

おちんちん



もう少し  
ローション  
足しましょう  
か?

その  
ローション  
なんか入って  
ますか?

あつ  
あつ



なつなんで  
細葉入りなんて  
……

……

内緒です♡

※虎杖ファイルター



あ

俺とッ

伏黒さんの  
ちんちんがッ！





伏黒さん！  
これ以上  
されるとう

もう我慢  
できません  
っ！！

いいですわ

虎杖さんの  
ガチガチちゃんぽ

カ  
IP

おまんこ  
マッサージ  
してあげます♡

おまんこ  
マッサージ  
してあげます♡

ふっ









はーっ  
♡

はーっ  
♡



……



……  
うん……

うん！

……



じゅん  
今度は俺が  
マツリーニ御ね！

ん

こんなかんじで

なんでも  
お願いを  
聞いてくれる





じゃあ  
今日は…

んんん

機軸の  
すけべメイドが

玩具で  
お仕置きプレイ！

それがどんな

んんん

んんん



変態  
プレイでもー

乳牛牧場の  
お乳の出が  
悪くなって

メンテナンス

中三野

種付けセックス！



伏黒って  
なんで俺のお願い  
断らないの？

？



伏黒……ッ



恥ずかしい  
ときはあるけど

楽しいし  
！気持ちいい



気に入らな

さすがに  
これは

イヤだなあ  
とかないの  
？

べつに？



じゃあ今度  
伏黒がいくまで  
ケツマンコ  
詰め回しても  
いい？

No!

それは  
ムリ

アレ？

( 完 )

## Guest

ゲストに、やにしさんと五臓六腑さんとKTRさんが来て下さいました！  
(お三方から)最高のめぐミルクをいただきました！！  
超超超えっっち超超超えっっちでございます。

ここで感想を言ってしまうとネタバレにしかならないので  
ぜひゲストページ楽しまれて下さい！メインです！

「見せてもらおうか、ゲストさんのえちえち母乳虐伏とやらを。」



この牧場で働き始めて、約一年。

初めの頃は馴れないことはかりで怒鳴られていたけれど、牛達と触れ合っていく内にコツやタイミングが掴めるようになってきて、今ではたくさんある小屋の内の一つを任せられるまで成長した。

ここでは、珍しい牛が二頭いる。種の間体なのに、雌と同じように乳が出る。その味は濃い甘味があって、高糖質に需要があるそう  
だ。

だけど、この牛がなかなか手がかかって、

「伏黒い！」

牛の名前は、伏黒果実。名前を呼んでみたものの、まだ布団に包まっ  
ていて、ミノムシ状態だ。

伏黒はまだ仔牛のせいかな、音動や仕草に幼さが見られるが、とて  
も賢い上に大人しくて、人の言葉を正しく理解できる。でも、基本  
的に信用した人間以外には懐かないし、乳も出さない。

とは言え、伏黒の出す乳は希少価値が高く、牧場長はどうしたら  
伏黒から乳をもっと搾り出せるか日々試行錯誤している。

「伏黒、元氣してた？」

「……」

部屋に入って伏黒のそばに腰掛ける。伏黒はやつと俺が来たって  
気付いたのか、毛布から厚敷く出てくると俺の胸に飛び込んできた。

人間だと十二、三歳ぐらいの身長になるか。ずつと小さな頃から  
成長を見守ってきただけに、大きくなったなあとも感動する。伏黒は  
俺をぎゅぎゅう抱きしめて、どろどろに甘えてくる。普段はツ

ンとしているのに、二人つきりになると甘えんぼっていう意外な一  
面がたまらなくて、ついつい他の牛達よりもえこひいきしてしまっ  
う。

「今日は、ちやんとご飯食べた？」

「食べた」

「いっぱい寝てる？」

「ねてる」

俺がそう聞くと、伏黒は手短かに言葉を返す。どちらかと言えば口  
数が少ない方だけれど、今日は明らかに声に元気がない。少し挫れ  
ている気もする。

その原因がわかっているだけに、俺は伏黒を抱きしめて、頭をよ  
しよしと撫でる。伏黒の毛は細くて、柔らかくて、触っていると気  
持ちが良くて、ずつとそうしてやりたくなる。

「……いたどり」

そうしていると、伏黒はさつきよりもちつと強い力で俺を抱き締  
めてきた。俺の名を呼ぶ声は、どこか涙ぐんでいるようにも聞こえ  
る。俺が来るまで誰にも触れなくて、一人ですつと我慢していたん  
だろうなって思うと、愛しくて、可愛くて、その健気さに心が苦し  
くなる。

「聞いたよ……怖かったな」

「……」

俺以外になかなか乳を出さない伏黒にやきもきした牧場長は、午  
前中休みの俺の隙を狙って、強行手段に出たらしい。

いつもは俺が来るはずの時間に、伏黒と全く直議のない飼育員が  
三人来て、無理矢理乳を搾り出すとしたそうだが、伏黒は罵れる事  
もなく、顔を青くさせてじつとしていたらしい。だけど、手で搾り

出されても全く乳は出なくて、ついには搾乳機を使った。でも、伏黒は搾乳機を使つても乳が出ず、全くなく手ぶらで帰ってきた。その後、牧場長にねちねちと嫌味を言われて、大層へこんでいるのだと、この小屋で一睡に働いているケツから聞いて、ムカつくと同時に泣きたい気持ちになつた。

「そんな落ち込むやつ、大丈夫、少しずつ慣れていけばいいから」伏黒は感情が顔に出るタイプじゃないけれど、とても感受性の高い子だ。牧場長の言葉に、どれほど深く心が傷ついたんだろううつて思うと、めちやくちやに甘やかして、慰めてやりたくなる。

でも、この牧場のためを思うと、そろそろ俺以外にも慣れてもらわないと困るのも事実だ。いくら希少価値が高くても、俺がいなくても乳を出せるようになってもらわないと、伏黒は食用にさせられしてしまう。それだけは、何としてでも避けたい。

なのに、心のどこかで、俺以外に懐いて欲しくないって願んでしまつている自分がいて。

「お前なら……」

「んや」

「お前なら、平気だ」

そんな俺の欲望を見透かしたように、伏黒は誘惑していきな。

伏黒自身にその自覚はない。無類な心のまま、自分の本心を俺にぶつけてきているんだらう。

その真つ直ぐさが眩しくて、だからこそ俺を惑わせる。

「え……でも」

「平気だつて言つてんだろ。早くしろ」

伏黒は賢いが、頑固な一面がある。これと決めたら根子でも動か

ない。今も、ムツとした顔をさせて、大きな目で俺をじつと睨みつけてくる。こうなつたらもう何を言つても無駄だ。

「ひ……ひ……」

ペロソツと伏黒が着ている牛柄のワンピースを二気にめくり上げる。驚いたのか、伏黒は小さな悲鳴を上げた。珍しい種のせいで、幼い頃から強引な行為を強制されてきた伏黒は、少しでも荒っぽい真似をすると、酷く怯えてしまう。それを分かっているからこそ、こんな風にはしたくないのに、そんな俺の思いを、少しだけでもわかつてくれるといいんだけどな。

「すげー腫れてんじやん」

「う……うう……」

「なあ、やつば無理だつて、また今度にしよか？」

無体な行為を強いられたせいで、伏黒の乳首は真っ赤に腫れていた。嫌なのにソソクと尖つたその二は、見ているだけで痛々しい。

どす黒い感情が湧き上がる。

俺の伏黒なのに。

すつと、すつと大切に育ててきたのに。

「やだ」

「やだつて……あのなあ、俺は、お前の体を心配して」

「だつて、これが俺の仕事だから」

心が抉られる。そうだ、伏黒が言っていることは正しい。俺たちは飼育員と家畜という関係で、それ以上でもそれ以下でもない。本来なら、こんなに伏黒に思入れをする時点で、担当から外れるべきだつていう事もわかつてる。

「でも、泣いているじゃん……」

「……アッ」

大きな目の端からぼろぼろ涙がこぼれ落ちてるのを見て、心苦しくなる。まだ伏黒はこんなに幼くて、小さい。なのに、人間の勝手な都合で、理不尽な目に遭わされているのが可哀想で、俺のやっていいことなんて、思ってもならないって分かっているけれど、せめて伏黒に無理だけはさせたくない。

でも、伏黒はそんな俺をどこまでも信じてくれる。

「ちよつ、なに……か」

伏黒は俺の胸を引っ張ると、パンツ越しに手の平を股間に当ててさせた。かたく、あつい感触が感じられて、思わず息を飲む。

勃起している。まだ幼いせいで、テントが張っていることに気が付かなかった。

震えている俺をよそに、伏黒は手の平の感触に夢中になっているのか、わずかに腰が揺れている。

「きもち、いいから……」

小さな唇から、吐息みたいな声で囁かれる。伏黒にそんな気はないうってわかつている。だからさっさと、無自覚に俺を信じてくれるんだって事も。

いっせ、何もかもがぶちまけてやりたい。

お前がどれだけ可愛くて、めちやくちやにしてやりたいくなる存在なのかって言うことを。

「おまえとすると、きもちいいから、こうなる……」

なんで、なんで、そんな風に俺を誘惑してくるんだよ。どうして、もっとして欲しいとでも言いたげな目で見てくんだよ。俺は我慢し

てんのに、お前を傷つけたくなくて、優しくしたくて、一生懸命堪えてんのに。

そんな風にされたら、俺……

「伏黒……」

「……アッ」

少しだけ、ほんの少しだけ、本当俺をお前に見せてやる。俺がどれだけお前に対して、酷くて汚い感情を抱いているか。それと同じくらい、大切に思っているか。

たとえそれでお前が俺を嫌いになったとしても、構わない。

「ちよつとだけ、ガマンできる……か」

伏黒は、きょとんとした顔で、目をパチパチさせている。俺が言った言葉の意味も、その裏にある劣情にも気付いていないんだろう。取いた笑いがこぼれたのは、無意識だった。それで伏黒はやっと、まずい気配を察したみたいで、じわりと後退し始めた。だけど、もう遅い。俺は伏黒のパンツを一気に下にずらすと、伏黒のまんをそつと手の平で握って柔く揉んだ。

「やああっ」

小さい。毛すら生えてない。まだ子どもだ。だけど、ちやんと勃起して、触れると甘ったるい声で嫌がる。

そんな声を聞いたら、もうダメだ。

止まらなくなる。その声をもっと聞きたくなる。

「いたどり……いたどりっ」

「んーっ」

「なんで……なん、でえ……か」

俺の首を掴んで、そこから手をのかさうとささせる。なんでって

必死で固いてくる伏黒を見て、やっぱり無自覚だったんだなって苦笑いしたくなる。

どうして俺がお前のちんこずっと触ってるかかって？ そんなん、お前がよがり任った姿が見たいからに決まってるんだろ。

俺だけに甘えて、俺だけをずっと見て、俺だけを求めるお前が欲しいんで。

「うらひ……これか、ひんご……」

「じやあ、やめよっか……」

「……」

それまで弄っていた手を離すと、ハッとなって今度は袖をぎゅっと握りしめてくる。頼る伏黒を見て、思わず笑ってしまふ。伏黒を追い詰めているのは俺でもない俺自身なのに、俺にしか伏黒は頼る事ができないんだっていう事実に、満たされていく。

「やだっ、やめるの、やだあ……」

「っらいんだろ？ もう、やめよっ」

「やらっ、する……まら、する……」

大きな目からぼろぼろ涙がこぼれ落ちていく。さっきまでの気持ちよさから落けていた喉とは違ふ、辛そうで苦しそうな呻。心が痛い。罪悪感でいっぱいになる。

「めんな、そう伝えるつもりで、おでこに軽くキスをすると、伏黒は安心したみたいに目を閉じる。そのまま顔を軽く吸うと、嫌がるどころか擦り寄ってくる。どこまでも従順な伏黒。そんな情れで愛しい仔牛の頭を撫でると、ついさっき置いた牛乳瓶を手を取って、もう一度伏黒の乳へ当てた。

「ううーっ、う……かう……う、うっ」

さっきよりも勢い強くミルクが溢れ出る。甘い匂いもより強く漂ってくる。情気に声を殺そうとしていたけれど、喉はめちやくちやに感じまくって、涙を流しながら目をぎゅっと閉じている。

伏黒のちんこを上下に軽く吸いていくと、先っぽからぬるしたもんが漏れ出てくる。尿道をクリクリッと指の腹で擦ると、ピクピク体を跳ねさせながら首を振って嫌がる。

「あん……ああ……やめあ……」

伏黒の腰がどんどん後ろへ過けていく。他人から与えられる快感に慣れていない伏黒にとって、この刺激は強すぎるっていうことも分かっている。それでも、俺が今伏黒を気持ちよくさせているんだっていう事実に陶醉して、何も考えられなくなっていく。

伏黒に気持ちいいことだけ与え続けたいなら、もっと欲しがるようになんのかな。

「でう……もお……でやあ……」

手の平のちんこが、ぶるぶるって震えている。ああ、もうイっちゃもうんだなって分かる。

こんなに小さくても、伏黒の体は液体になりつつある。なのに、溺もあてられずに、蝶のように扱われて、毎日俺に乳を搾られて、普通なら、俺を嫌悪してもおかしくはないはずなのに、俺だけに懐いて、甘えてきて。

どうして、お前は俺を――

「あああっ、あ……ひっ、ヒッ……」

手に平に熱くて白いものがかかる。伏黒がイったんだ。俺の手で、その事実に、思考が麻痺していく。もっと気持ちよくなって欲しくて、イッてんにに扱くと、背を仰け反らせてピクピク体を震わせる。



過ぎた快楽を受け止められないのか、口の端からは唾液が垂れて、舌を突き出して息を吐けていて、その様子が醜くいやらしくて、思わず唾を飲み込んで魅入ってしまった。

「……よく頑張ったな」

「あ……あ……」

今にも跳たい掛かりたい気持ちを通理やり殺して、できる限りの優しい声で伏黒を褒める。イっただと同時に勢い良くあふれ出たおかげで、ピンは満タンになるまで搾り取れた。よくやったと言う代わりに、伏黒の首をよよしと撫でると、髪が切れたかのように涙がぼろぼろ流れ落ちていく。

「いたどり……いたどり……」

「……」

俺の首筋に腕を回されて、ぎゅっと抜き締められる。すんすん鼻を鳴らして泣きべそをかきながら、すりすり体を搾り合わせてくる。かわいい。そんなかわいいことをされたら、もう我慢なんてできない。

「んひ……っひ」

目の前にある伏黒の乳首に舌を伸ばす。伏黒が小さく悲鳴を上げて、ピタッと体を震わせる。腕を離して俺から距離を取ろうとしたのを察して、伏黒の腰を寄せて無理矢理近づけさせる。そのまま乳首を軽く吸うと、甘くて濃厚な味が口いっぱい広がる。初めて飲んだ。伏黒のもの。

これを知っているヤツが、他にも。

「なに……なん……っ」

「もつたいねえから……」

「や……いらなっ、それっ、いらな……」

押つてなかつた方の乳は、まだ出したりしていないみたいで、吸い上げるとびゅっとなお勢い良く溢れ出てくる。舌で舐め回すと、どんな乳首があつていく、元々弄られて腫れ気味だったそこを潰められたら一滴りもなかつたのが、伏黒はただ囁き泣く事しかできないみたいで、俺の腹を搾り締めながら、必死で耐えていた。

「あああ……や、やあ……」

立てた膝がガクガク震えて、生まれたての小籠みたいになっている。俺が腰を支えてないと、倒れてしまいそうなんだけど、さっきいつたばつかの伏黒のまんは、もう軽く勃起してて、乳首でめちやくちや感じてるのが分かって、馬鹿みたいに興奮していく。

これをやり続けたら、いつかこたけでイったりする事もできるのかな。

「あ……あ……あ……っ」

声が弱々しくなっていく。同時に、体から完全に力が抜けていく。俺にくっつたりもたれかかった伏黒に違和感を感じて、乳首を口から離して見つめると、伏黒は目を閉じていた。

「伏黒……っ」

声をかけても返事がない。少し様子がつてみても、何の反応もない。意識を失っている。そう分かった瞬間、一気に罪悪感が込み上げた。

「……伏黒」

そつと体を布団に横たわらせる。

細い体だ。こんな体で大の大人に抵抗なんて、できるはずもない。結局俺も、伏黒を利用してさうとしていたヤツらと一緒だ。

下敷で、自分本位で、最低な野郎。

「連れ去りてえなあ……」

許されないのは分かっている。そんなことをしたら、ここに居られなくなるって事も。

でも、伏悪と二人でここから抜け出して、誰にも脅かされる事のない穏やかで優しい場所へ行けたら。

叶いもしない望みを抱きながら、気を失った小さな体を、抱るようにぎゅっと抱きしめた。











おれ、のせい

大丈夫！  
ちやんと俺が  
責任取って

全部飲むから

は？

全部飲まれた







# ミルク パニック

2021/09/13

発行者 yku/chop!

Twitter : yoko\_tana3  
pixiv : users/2102859  
mail : tara.zukedon@gmail.com

印刷所 栄光印刷様

※無断転載、オークションへの出品を禁じております。

あとがき

パソコントラブルが生きてて多すぎるんですが  
今回もおきて入稿が遅れ発送等が大幅に遅れて申し訳ありません。  
そんなまじい時にKTRさんがゲスト参戦してくれて逆に得して  
パソコンが壊れるのも悪くないかもなと思えました。  
KTRさんお忙しい中助っ人でゲスト参戦ありがとう！  
やしさんと五臓六腑さんには早く原稿いただいていたのにすみません…

そして母乳要素が舞さすぎてすみません！！リベンジいつか！！  
伏黒くんは虎杖見るとすぐ濡れるって信じてる。

milk panic



# ミルクパニツク



## 呪術廻戦非公式ファンブック

原材料名： 虎杖悠仁×伏黒恵  
成分： 恵乳100%  
保存方法： 開封後はお早めに  
召し上がり下さい。

## 栄養成分表示(恵一人あたり)

エネルギー 2496kcal  
愛 情 2496 g  
タンパク質 2496 g

製造年月日：  
二〇二一年八月二十二日